

「キリストにある者達」

私達がこれまで見てきました「ローマ人への手紙」も、いよいよ最後の章となり、今日ともう一度、お話をして、それで終わります。記録を見ましたら、昨年6月25日から約10か月をかけたこととなります。

パウロは当時の世界の首都、ローマにも教会があると聞き、その教会に宛てて手紙を書きました。そして、彼はいつの日か、自らローマに行き、伝道をしたいと願っておりました。「全ての道はローマに続く」という言葉があるように、そこから世界各地に福音が伝えられる可能性は大きかったと思われる。

パウロがこの手紙を書いた時、彼はコリントにいました。彼はそのコリントからフィベという女性がローマに行くということを聞き、彼女にこの手紙を託したのです。そして、この手紙の最後に彼は、これまで共に主のはたらきをしてきた者達の名前をあげて、このように彼らに感謝をしています。

1 ケクレヤにある教会の執事、わたしたちの姉妹フィベを、あなたがたに紹介する。2 どうか、聖徒たるにふさわしく、主にあって彼女を迎え、そして、彼女があなたがたにしてもらいたいことがあれば、何事でも、助けてあげてほしい。彼女は多くの人の援助者であり、またわたし自身の援助者でもあった。3 キリスト・イエスにあるわたしの同労者プリスカとアクラとに、よろしく言ってほしい。4 彼らは、わたしのいのちを救うために、自分の首をさえ差し出してくれたのである。彼らに対しては、わたしだけではなく、異邦人のすべての教会も、感謝している。5 また、彼らの家の教会にも、よろしく。わたしの愛するエパネトに、よろしく言ってほしい。彼は、キリストにささげられたアジアの初穂である。6 あなたがたのために一方ならず労苦したマリヤに、よろしく言ってほしい。7 わたしの同族であって、わたしと一緒に投獄されたことのあるアンデロニコとユニアスとに、よろしく。彼らは使徒たちの間で評判がよく、かつ、わたしよりも先にキリストを信じた人々である。8 主にあって愛するアムプリアトに、よろしく。9 キリストにあるわたしたちの同労者ウルバノと、愛するスタキスとに、よろしく。10 キリストにあって錬達なアペレに、よろしく。アリストブロの家の人たちに、よろしく。11 同族のヘロデオンに、よろしく。ナルキソの家の、主にある人たちに、よろしく。12 主にあって労苦しているツルパナとツルポサとに、よろしく。主にあって一方ならず労苦した愛するペルシスに、よろしく。13 主にあって選ばれたルポスと、彼の母とに、よろしく。彼の母は、わたしの母でもある。14 アスクリト、フレゴン、ヘルメス、パトロバ、ヘルマスおよび彼らと一緒にいる兄弟たちに、よろしく。15 ピロロゴとユリヤとに、

またネレオとその姉妹とに、オルンパに、また彼らと一緒にいるすべての聖徒たちに、よろしく言ってほしい。16 きよい接吻をもって、互にあいさつをかわしなさい。キリストのすべての教会から、あなたがたによろしく（ローマ16章1節-16節）

ここには30名近い者達への挨拶が書かれています。そして、その内の13人はローマ皇帝の王宮や皇室と関係のある碑文や文書にも出てくる人達であり、その内の9名は女性の名前です。男性の存在が圧倒的に強かった当時であって、ここに記されている三分の一は女性であり、実際にその名前があげられていることは驚くべきことでした。今日もそうであるように、キリストの教会が建てあげられていくためには男性も女性も等しくその働きに参与すべきことなのだということが、その始まりからここに明らかにされています。

ここに記されている人達は全てパウロと共に福音宣教に生きた人でありまして、その中にはパウロと共に投獄された者もいれば、パウロと親戚の間柄のような人達、またアジアにおける初穂となった人もいました。ここに記されている全ての人を一人一人見ていきますと時間が足りませんので、今日はその中から四人の人にフォーカスしたく願っております。まず3節に書かれている「キリスト・イエスにある私の同労者プリスカとアクラ」についてであります。彼らは夫婦でした。

この夫婦は何度か聖書の他の箇所にも出てくるのですが、例えば使徒行伝18章などには彼ら夫婦とパウロがコリントの町で初めて出会った時のことが書かれています。1 その後、パウロはアテネを去ってコリントへ行った。2 そこで、アクラというPont生れのユダヤ人と、その妻プリスキラとに出会った。クラウデオ帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるようにと、命令したため、彼らは近ごろイタリアから出てきたのである。3 パウロは彼らのところに行ったが、互に同業であったので、その家に住み込んで、一緒に仕事をした。天幕造りがその職業であった。

夫、アクラは生粋のユダヤ人で、妻、プリスキラについて、その名前から分かることは、彼女はローマの高貴な家出身の女性だったようであり、ゆえに彼らはかつてローマに住んでいたのですが、夫がユダヤ人だったために、ローマから退去させられてコリントに移り住んできたようであり、

そして、パウロとの出会いにより、彼らは使命を共にしたようです。夫のアクラの生業は天幕作りでありまして、彼は一時、パウロと共に天幕を作りながら、宣教に従事していたようです。

おそらく互いにクリスチャンでありましたアクラとプリスキラは出会い、そして夫婦となったのでしょう。そう考えますと彼らは今日の国際結婚の先駆

けであります。それぞれの文化と言語をもった夫婦が心を合わせて主に仕えた時に、主の御わざがそこから成されていきました。

ローマ出身の女性がその支配下にあるユダヤ人を夫とすることはとても珍しいことであつたに違いありません。おそらくプリスキラの家族もアクラの家族もその結婚を反対したことでしょう。彼らの身分はあまりにも違うのです。しかし、彼らは互いに愛し合い、追放されたコリントでパウロと出会い、彼らはパウロの右腕、左腕となって命をかけて主に仕えたのです。「追放される」ということは辛い経験ですが、神様はその先に大切に使命を彼らのために計画されていたのです。パウロはこの二人との関係をこのような感謝の言葉で言い表しています。

『4 彼らは、わたしのいのちを救うために、自分の首をさえ差し出してくれたのである。彼らに対しては、わたしだけではなく、異邦人のすべての教会も、感謝している』（4）とパウロがここに記している通りです。

このローマ書を読みますと彼らについて興味深いことを発見します。当時の慣習をでは、夫の名前があげられても妻の名前が明記されることはほとんどなかったのです。そのような状況ですから、仮にもし夫婦の名前があげられるとしたら、夫の名前が必ず先にあげられました。ですから、この場合ですと「アクラとプリスキラ」でなくてはならないのです。しかし、この箇所では妻、プリスキラの名前が先に書かれています。これは珍しいというより、ありえないことなのですが、その理由はここには明確にされていません。しかし、想像しますに、おそらくパウロへの協力や伝道活動において、いつもプリスキラの方が積極的で、表に出ていたからであると考えられます。

神様は確かにこの女性に特別なギフトを与えて下さっていたのでしよう。そして、夫であるアクラはそのことをよく理解して、彼はこの妻をキリストにあって、謙遜に支えていたに違いありません。この夫婦はそれぞれが自分の担うべきものを自覚し、互いの働きを尊重し、心を合わせてパウロを支えていたに違いないのです。

コリント第一の手紙にはパウロがアクラとプリスキラの住むコリントの町にアテネでの伝道を終えて移って行った時の彼の心境というものを記録しています。パウロはコリントに来る前にギリシアのアテネに行って学問的に整った素晴らしい説教をしました。しかし、人々はそれによっては救われませんでした。彼は肩を落としてコリントの町にやってきます。パウロはその時の心境を包み隠さずにコリント第一の手紙2章3節にこう言っています「わたしがあなたがたの所に行った時には、弱くかつ恐れ、ひどく不安であつた」。そんな時にパウロはこのアクラとプリスキラ夫妻に出会ったのです。

そのコリントで意気消沈していたパウロの心の中に変化が起きたようです。彼は準備周到に整った説教によって福音を伝えようとしていたのですが、一つの確信にいたったようです。

その確信がコリント第一の手紙2章4節、5節に書かれています「そして、わたしの言葉もわたしの宣教も、巧みな知恵の言葉によらないで、霊と力との証明によったのである。それは、あなたがたの信仰が人の知恵によらないで、神の力によるものとなるためであった」。

もともと律法学者となろうとしていたパウロですから、とても頭の切れる人です。彼の説教は雄大な思想や哲学でしっかりと整えられていたに違いありません。しかし、パウロとて人間、整えられ、学ぶべきことがありました。賢いゆえに、知識が多いゆえに、当然、彼はその知識によって福音を伝えようとしていました。しかし、それには限界があったのです。そうです、いつの間にか「自分の言葉で、自分の知力で！」というような意気込みが先走りしてしまったのかもしれませんが、ゆえに彼は行き詰りました。

そんなパウロはコリントで目の当たりにしたのでしょう。身分が全く異なるユダヤ人の夫と結婚し、神から与えられている賜物を存分に用いているプリスキラ、そして、その彼女を献身的に支えているアクラ。

このカップルの姿の中にまさしくパウロは霊と力の証明を見たに違いありません。そう、それはキリストを中心に置き、互いに労わり、仕え合う姿です。彼らの姿を見るにつけ、彼は言葉を整えて、巧みに福音を伝えようとして、行き詰っている自分を省みたのでありましょう。

口先ではなくて、私もこの夫婦のようにまず、霊と力により生き、その力をもって語らなければならない、そんなことを彼はこの二人の無言の奉仕の中に見出したのでありましょう。

夫と妻はその生涯、互いにどのような立ち位置をとるべきでしょうか。恋愛をしているカップルがカフェのテーブルで何時間も飽きることなく、見つめ合って、うっとりしている、そんな時もありますでしょう。しかし、それはいつまでも続くものではありませんでしょう。長く向き合っていれば、当然、互いの欠点も見えてきますでしょう。互いに見つめ合っていれば、自分の思いとか願いばかりが先走り、互いの違いばかりが目につくものです。

ましてやアクラとプリスキラのような言語も文化も違う者同士でしたらなおさらでしょう。同じ言語と文化をもった者ですら、時に困難を抱えるのですから。

ですから、夫婦は手を握り合って、互いに同じお方を見上げればいい。そのお方こそがイエス・キリストなのです。それが夫婦生活の秘訣なのかもしれません。アクラとプリスカはまさしくこのポジションを生涯、保ち、キリストを見上げてキリストに従ったに違いありません。

彼らは同じイエスを見上げましたから、この二人には互いの身分の違いというようなものは問題ではなくなりました。彼らの前には十字架の主がおられたので、日頃から自らを省みることができ、その主の前に互いに低くなることができたのです。パウロの伝道者であったパウロにとりまして、この夫婦の生きざまはどんなに大きな驚きであったことでしょうか。どんなに彼らの姿にパウロは励まされたことでしょうか。ゆえに彼らへの感謝は尽きず、パウロは彼らの名前をまず最初にここに取り上げたのでしよう。

もう一人の人を見てまいりましょう。13節をご覧ください。そこには「主にあって選ばれたルポスと彼の母」について言及されており、パウロはこのルポスの母はわたしの母でもあるという心温まることを書いています。そして、マルコ15章21節などを見ますと、このルポスという名前がクレネ人シモンの子供の名前として出てきます。

すなわち、おそらく彼の父親はクレネのシモンであったようです。クレネのシモンとは誰ですか。ゴルゴダの丘に向かって、十字架を背負って歩くイエス様の代わりに十字架を背負わされた人です。すなわち、そのシモンの息子がこのルポスであり、そのルポスの母とはシモンの妻であったわけです。

この家族の生活を聖書は事細かに記録していません。私達に分かるのは、このシモンの息子、ルポスとその母がパウロにとって大きな存在であったということです。ここに父、シモンの名がないということは、もしかしたら彼は早くに召されたのかもしれませんが。私達に分かるのは、この親子が夫でもあり父でもあるシモンから何度も何度もイエス・キリストの十字架の話を聞いたということです。

そうです、十字架におかかりになる直前のイエス様の一番、近くにいたのは紛れもなくこのシモンでありました。彼はイエス様を助けようとその場にいたのではありません。その時のことを記録している福音書を読みますと、彼は自分の気持ちとは反して、全てのことは強制的にさせられたということが分かります。

すなわち、彼は「見つけられ(εὐρίσχω)」(マタイ)、「つかまえられ(ἐπιλαμβάνομαι)」(ルカ)、「むりやりに(ἀρραρεύω)」(マタイ、マルコ)、イエスの十字架を「負わせられ(ἐπιτιθημι)」(ルカ)「背負わされ(αἰρω)」(マタイ、マルコ)、イエスの「うしろから(ὀπισθεν)」(ルカ)「運ばせられた(φέρω)」(ルカ)のです。

シモンは十字架を背負い、イエスと共にゴルゴダの丘にいたり、おそらく、そのままそこにとどまり、イエス様になされた一部始終を見たことでしょう。そして、イエス様が十字架の上で語られたあの七つの言葉を実際に聞いたに違いありません。自分は嫌々、十字架を背負った。しかし、そのことにより神は私に信じがたきお方の姿を見せてくれた。それがどんなに強烈な体験であったのか、彼は繰り返し、このことを妻に、そして息子に伝えたに違いありません。そして、その福音は確かに彼らに継承されたのです。

主にある皆さん、私達はわが子に伝える「これを知っておけばだいじょう」というものがあるのでしょうか。そして、それを伝えているのでしょうか。

親と子の断絶というようなことが言われて久しくなりました。親子は互いにどんな関係をもっていくべきなのか。先ほどの夫婦、アクラとプリスキラがそうであったように、親子も向き合っているのであるなら、互いに違いばかりが目につくでしょう。子にとっては親の言動は古臭く思われ、親にとりまして子のなすことは未熟に思われるでしょう。

ですから夫婦がそうであるように、親も子も手を取りあって、キリストを共に見上げるのです。そのところに親と子、家族の本来の姿があるのです。ルポス親子はイエスの十字架を共に背負ったという父、夫をもち、その夫が生涯、語り続けたそのイエスを互いに見上げつつ、パウロの働きを支えたに違いありません。

最後にもう一人の人を見て終わらしましょう。11節をごらんください。ここには「同属のヘロデオン」と書かれています。ヘロデオンという呼び名、どこかで聞いたことがありませんか？それはヘロデの家の人々という意味です。イエスが生まれた時に、自分の王位をねらうもの、脅かす者だと幼子イエスを殺そうとした、ヘロデ大王の血につながる者であります。ですから、別の言い方をすればかつてはイエスの宿敵であった一族出の者であるということです。

しかし、このヘロデオンはどこかでキリストを信じる者とされたのでしょうか。自分の体には誕生間もないイエスを殺害しようとした一族の血が流れている。その血統を考えれば、自分がそのイエスを己が主として生きるということは考えられない。

そんな彼は人生のどこかで気がついたのでしょうか。キリストが十字架で流されたその血潮は、彼が生まれた時から持ち合わせていたこの血統を無意味な者としました。彼がどんな民族の中で生まれたとしても、その先祖がイエスを

殺そうとした者であったとしても、イエスの十字架の愛の中に生きることができる。そのことをこのヘロデオンは私達に語りかけています。

ヘロデオンが信仰をもつことは他の人よりも難しいことです。彼の家族との関係がありますから。しかし、彼は横を見ず、周りを見ず、やはりアクラ、プリスキラ、シメオンとその母と同じように、イエス様を見上げたのです。

私達は一人の人間としてどう生きていくのでしょうか。「個」という言葉が盛んに言われる世の中です。人は「個をしっかり持て」と言います。言い換えれば「自分自身をしっかり持て」ということです。しかし、そのためには私達がしっかりとしたものを見ていなければなりません。その見ている対象がいつも揺れ動いているのなら私達も自分自身を固く保つことなどはできないのです。

確実なる個は、確実なる存在があって形成されるものです。私達の個は私達一人一人がキリストの十字架の前に立つ時に生れてくるものなのです。キリストにあっては、その人の出生や職業は関係ありません。過去に何をしていたか、周りの人間がどうあるかということは、問題ではないのです。そのことをこのヘロデオンという名前は私達に明らかにしているのです。

今日はちらしを皆さんにお送りしています。来月27日には恒例のチャーチピクニックがあります。その日には日本から井上薫という牧師をお招きしています。彼はかつて北海道で極道の世界に身を置いていた者でした。かつては「五条通の喧嘩屋」と呼ばれ、好き放題生き、最後は覚醒剤のとりことなり、廃人となりました。しかし、その彼がひとりの女性と聖書に出会い、回心し、今は小さな石をも主は用いられると「スモールストーン」というミニストリーをしながらご夫妻で日本、世界を駆け巡り、イエス様を伝えています。

この度はピクニックで「人生、やりなおせる」というお話を井上先生からしていただけたらと願っています。かつてやくざであった夫がどのように変えられてきたのか、そのことをミセスからもお聞きしたいと思います。まさしくキリストにあって、その人がどんな生き方をしてきたとしても、その人は変わることができるということを知って欲しいと思います。祈りつつ、ご家族、ご友人をお誘いください。

このローマ書を書いた後、パウロは遂に手紙のみならず、自身もかねてから願っていたようにローマに行くことができました。その時にもう既にパウロの名はよく知られていました。その名は福音を伝える宣教者として、そして同時に世の中をひっくり返そうとしている異端児として。故に彼の命を虎視眈々と狙う者達が彼の回りにはいつもいたのです。

普通で考えたら、そのパウロがローマまでの旅を安全に続けることは危険を伴うことであり、否、それは不可能なことでした。しかし、彼は捕えられて、囚人として護送されながらローマに連れて行かれたのです。彼の命を狙う者達がいる時に、彼は当時の世界最強のローマの軍隊に守られてローマに行ったのです。何と神のはかりごとは深いのでしょうか。

そしてパウロが殉教して300年後、キリスト教は全世界を支配しているローマ帝国の国教となりました。皇帝をはじめ、全てがキリスト教に帰依したのです。そして、世界中にキリスト教が伝わるための大きな基が築かれたことを、私達は歴史の中に見ることができるのです。彼はそのことを観る事ができませんでしたが、確かに福音はローマ通過して全世界に伝えられたのです。

そして、その福音は日本を經由して、このサンディエゴにも届けられて今日、この教会はあるのです。今日、お話ししましたようにこの背後にはパウロの存在があります。しかし、それはパウロ一人で成されたものではありません。彼と共に宣教のわざに関わりました、アクラとプリスキラ夫婦、ルポス親子、そしてヘロデオンというキリストを見上げた者達がいたのです。

そのような意味で私達も今、この神の宣教のみわざに関与しています。そして、そのみわざは主イエスを見上げる者達により、成し遂げられていくのです。私達は互いに見つめ合って、あなたはこうね、私はこうねと品評するような間柄なのではなくて、私達は互いにキリストを見上げて生きる者なのです。

日々の生活において、四面楚歌というようなところを通ることもありますでしょう。しかし、私達は主イエスを見上げます。そうです、雲の上はいつも快晴なのです。どうして己の手の内にあるものだけを見て、時に喜んだり、時に心を沈んでいるのか。互いを見て時に優越感にひたり、時に敗北感に打ちのめされているのか。『主を仰ぎ見て、光を得よ、そうすれば、あなたがたは、恥じて顔を赤くすることはない』（詩篇43篇5節）。お祈りしましょう。